第14号

1 May 2015

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No.14

# 第14回全国大会開催

2014年11月9日（土）、上智大学において、第14回全国大会が開催されました。

午前中は、二つの会場に分かれて、計5本の個別研究発表が行われました。

第1室の報告者は、若名咲香氏（上智大学・特別研究員）、桐山恵子氏（和歌山大学）の2名で、司会は山口惠理子氏（筑波大学）にご担当いただきました。第2室では、清水有理氏（日本女子大学・大学院）、麻畠徳子氏（広島経済大学）、松隈達也氏（福岡大学・非常勤講師）にご報告いただき、川端康雄氏（日本女子大学）に司会をお願いいたしました。5本の研究発表については、次頁以降、報告や討論の要約を載せていますので、ご覧ください。

午後は、総会（関連記事、7～10 頁に掲載）の後、シンポジウム「破壊と創造――第一次世界大戦とイギリス作家たち」が開催されました。河内恵子氏（慶応義塾大学）の趣旨説明と報告の後、遠藤不比人氏（成蹊大学）、秦　邦生氏（津田塾大学）、中井亜佐子氏（一橋大学）がパネラーとなって、第一次世界大戦時のイギリスの作家、芸術家がどのような作品を生み出したのかが議論されました。

シンポジウムと並行して、ラウンドテーブル「少女マンガとネオ・ヴィクトリアニズム――『バジル氏の優雅な生活』から『黒執事』まで」が開かれました。ラウンドテーブルは初めての試みでしたが、川端有子氏（日本女子大学）のコーディネートのもと、フリーライターの村上リコ氏をお招きして、大変に興味深い議論が展開されました。

大会の最後に、丹治愛氏（法政大学）をお迎えして、「E.M.フォスター『モーリス』と緑林――イングリッシュネスと同性愛」と題する特別講演をいただきました。

また、大会後には、総会、懇親会が開かれました。

シンポジウム、ラウンドテーブル、特別講演の内容については、『ヴィクトリア朝文化研究』第13号（2015年11月刊行予定）に掲載予定ですので、そちらをご参照ください。

## 目　次

第14回全国大会開催　1

研究発表の記録
若名咲香　2
桐山恵子　3
清水友理　4
麻畠徳子　5
松隈達也　6

2014年度総会報告　7
2013年度決算　8
2013年度懇親会決算　9
2014年度予算　10

会員名簿、会員の業績について　11

＜学界動向＞　12
「19世紀末イギリスにおける『社会』の再編と理想主義」
高田　実

第15回大会シンポジウム　14
＜趣旨説明＞
「神はどこにおられるのか」

第15回大会ラウンドテーブル
＜趣旨説明＞
「大阪・神戸とヴィクトリア朝英国」　16
「ヴィクトリア朝文学と　宝塚歌劇」　18

第15回大会の告知　20
自由論題報告募集

第16回大会シンポジウム・ラウンドテーブル募集

【研究発表１】

# ヴィクトリア朝絵画における「つれなき美女」のイメージ
## ―ウォーターハウス《つれなき美女》をめぐって―

若名 咲香

ヴィクトリア朝の画家ジョン・ウィリアム・ウォーターハウスは、1893年のロイヤル・アカデミー夏期展に油彩画《つれなき美女》を出品した。この作品の題材であるジョン・キーツの詩「つれなき美女」は、他のヴィクトリア朝絵画でも多く取り上げられた。ところがウォーターハウス作品は、類例のない構図とキーツの詩に言及のない表現という、他の作品とは大きく異なる独自性を持つ。

これまで、ウォーターハウス作品の特異な図像の成立背景は深く論じられておらず、ヴィクトリア朝絵画における「つれなき美女」の主題を詳述した論考も少なかった。本発表では、「つれなき美女」を題材にしたヴィクトリア朝絵画を概観した上で、ウォーターハウス作品に描かれた様々なモチーフや構図について文学作品や他の絵画作品を参照しつつ分析し、独自の表現を用いた画家の意図を検討した。

「つれなき美女」を題材とするヴィクトリア朝絵画を改めて調査すると、二つのタイプに大別できることが判明した。一つ目のタイプは騎士と馬上の妖精を組み合わせた構図で、詩の6連目を絵画化している。詩の6連目は、主導権が騎士から妖精に移行し、騎士と妖精の関係の転換点となっている。騎士を妖精よりも下に配する画面構成は、視覚的に二人の上下関係を暗示する。二つ目のタイプは眠る騎士と妖精を組み合わせた構図で、詩の9連～11連目を絵画化している。ここでも騎士は妖精よりも下に配され、さらに眠る無防備な姿で描かれており、妖精の優位を示唆している。これらの分析から、ヴィクトリア朝の画家たちが妖精にいわゆる「宿命の女」のイメージを見出し、それを表現するために、誘惑に屈した騎士を妖精の下位に置くという構図を採用したと考えられる。

一方ウォーターハウス作品は、妖精に向かって騎士が身を屈めるという、類例のない構図である。ただし絵画と詩の照合や背景描写の分析を行うと、詩の4連目で騎士が誘惑に屈する瞬間を描いたとわかる。他の作例では騎士が既に誘惑に屈した後の場面が選択されているが、ウォーターハウス作品ではまさに誘惑に落ちる瞬間を捉えているのである。また、習作と完成作との比較によって、完成作に至る過程での追加点や変更点は、誘惑に屈する瞬間の緊迫感を高める演出であると判明した。さらに禁欲的騎士道精神を象徴する鎧のモチーフは、妖精と騎士の対照的なセクシャリティを強調する機能を持つ。そして槍や妖精の服の意匠等は、妖精の誘惑が官能的なものであることを暗示する。つまりウォーターハウス作品は、細部描写やモチーフの象徴的意味を効果的に利用し、死に至る官能的誘惑というキーツの詩の本質的テーマを描出したのである。

さらにウォーターハウス作品には、騎士の首に巻きつく妖精の髪という、原典の詩に言及のない描写がある。従来この描写のイメージ・ソースとしてD.G.ロセッティの素描やA.C.スウィンバーンの詩の一節が指摘されてきたが、特定の作品のみと結びつけることは難しい。しかし男性の首に巻きつく女性の髪のモチーフは、ヴィクトリア朝の絵画や文学で頻出していた。そこには男性を誘惑・束縛する髪、死をもたらす凶器としての髪、という二重のイメージが込められている。本発表では、ウォーターハウス自身もこの二重イメージに関心を寄せており、《つれなき美女》の妖精の髪のモチーフにも同様の象徴的意味を読み取れることを指摘した。つまりウォーターハウス作品は、ヴィクトリア朝文化に広く浸透していた女性の髪のイメージと強い接点を持つと言える。

そして「つれなき美女」を題材とする他の作例と比較すると、ウォーターハウス作品は原典の忠実な再現を重視していないことが明らかになった。しかし原典から逸脱する描写こそが、イメージの幅を広げ多様な解釈を促す要素でもある。つまりウォーターハウス作品の特異な表現の背景には、最終的に死に至る官能的誘惑というキーツの詩の本質的テーマを描出し、同時代の絵画や文学と結びつくことで作品解釈の幅を広げる、という意図が介在していたと考えられるのである。

【研究発表２】

# ワイルド詩と印象派絵画

桐山 恵子

オスカー・ワイルドの詩を近代的絵画との比較により再評価することを目指した本発表では、これまでもその関連性が指摘されてきたホイッスラー絵画とではなく、両者の影響関係が本格的に論じられることはなかったフランス印象派絵画との比較を行った。取り扱う詩としては『詩集』(1881)およびそれ以後に雑誌などに掲載されたものを含めた。

ワイルドがテムズ川の夜明けをうたった「朝の印象」“Impression du Matin”は、ワーズワースの「ウェストミンスター橋で」を念頭において創られている。しかしワーズワースが朝日に照らされたロンドンを描いたのとは異なり、ワイルド詩では冒頭“The Thames nocturne of blue and gold”で「夜想曲」とうたわれることからも、「朝」というよりは夜に近い。さらなる違いとしてワーズワース詩では色を示す単語が一切ないのに対して、ワイルド詩では “blue, gold, grey, ochre, yellow”と多様な色が使われている。そもそも詩のタイトルがフランス語であることは、1874年にパリで開かれた展覧会にモネが出展し、のちに印象派という名称が生まれるきっかけとなった絵画《印象、日の出》*Impression, soleil levant*を想起させる。モネが港町の風景それ自体を描くことを目的としたのではなく、「日の出の印象」つまり太陽の光の変化が作りだす色の効果を画布にとどめたように、ワイルドもテムズ川の具体的な風景を描写するというよりは、そこから浮かびあがってくる「朝の印象」をうたったのだ。印象派画家がパレット上で色を混ぜずに本来の色彩のままキャンバスにのせたように、ワイルドは言葉の織物である詩というキャンバスの上に、色を指し示す言葉で彩色することによって一篇の絵画的な詩を作りあげたのである。

以下、印象派絵画との関係をワイルド詩のより具体的な描写に基づいて見ていく。アイボリー色の手をした女性が“ivory keys”をたたく様が描かれる“In the Gold Room”では、ピアノを弾く手の動きが輝く木々の葉にたとえられるが、その木が「ポプラ」と特定される点に注目したい。なぜなら印象派が戸外の自然を描くことを好んだのは言うまでもないが、モネとシスレーはまさに「ポプラの木の連作」を完成させている。続いて紹介した詩“La Dame Jaune”において、女性の黄色い髪がキャンドルの光にちかちか揺らめく様を描写したワイルドは、印象派画家と同じように光の反射の効果に注目している。さらに彼女の蜂蜜色の髪の毛は“Venice glass”に刻まれた黄金の意匠のようだとうたわれるが、ヴェニスは水に映る色彩の効果に魅せられた画家にとって憧れの街だった。ルノワール、モネら多くの画家が運河の街ヴェニスを描いている。また印象派というとジャポニズムの影響に言及せずにはいられない。“Fantaisies Décoratives”に登場する「漆黒の髪」の女性は「銀の鶴」のように歌い、彼女の恋人は東洋人の特徴である “almond eyes”をもっており、ジャポニズムの影響が顕著である。

ここまでワイルド詩における色、光、水、ジャポニズムを考察してきたが、“Symphony in Yellow”では絵画とのさらなる発展がうかがえる。というのも、これまでの詩でも黄色は頻繁に使われてきたが、蜂蜜、レモン、琥珀というように黄色の色彩の様々なバリエーションがうたわれてきた。ところがこの詩では“yellow”のみを4度も繰り返す点に、色を極力混ぜずに単色で細かい点を繰り返して描いた後期印象派画家スーラの点描画を連想させるのである。

最後に、質疑応答ではワイルドは印象派画家と面識があるのか(1883年にパリでドガらと会っている)、ラスキンの影響はあるのか(もちろんあるがラスキンが重視した芸術における道徳観をワイルドは持ちあわせていない)、『詩集』出版時に色彩の詩はどのように評価されたのか(『詩集』には伝統的なソネットなど他ジャンルの詩も多数おさめられており、おそらくあまり注目されなかった)、詩のなかで多くの色を使いすぎではないのか(そうすることにより、たとえば赤＝情熱、青＝孤独など、色が何らかの意味を示すことに抵抗したかったのではないか)など、多くの示唆に富んだ質問を頂き、充実した発表をさせて頂いた。

【研究発表３】

# 煙突掃除の少年とClimbing Boy

清水 友理

煙突掃除の少年は、児童労働や格差を訴えるキャラクターとして、様々な作品に登場してきた。彼らは、イングランド産業革命をへて発見されたmiseryを表象するシンボルの中でも、強いインパクトを持った存在である。それにも関わらず、従来の児童労働研究において、煙突掃除の少年は主要な研究対象ではなかった。本発表は、前半で、煙突掃除の少年に表象の観点から再照射するうえで重要なタームとして、 Climbing Boy（以下、「クライミングボーイ」）に着目した 。後半では、煙突掃除の少年に対する保護運動を、「クライミングボーイ」の言葉から捉える一例を示した。

煙突掃除業に児童が使われていたのは、18世紀半ば頃から19世紀後半のことである。その特徴は、煙突内部を登り降りすることによって煤を掻き出すという、独特の掃除方法にある。自らをブラシの様に使うこの方法は、体の小さい子どもでなければできないもので、彼らが置かれた苦境の根源であった。業種全体の動員数が少なかったため、従来の研究において、煙突掃除の少年はマイナーな労働者グループの一つとみなされていた。

だが一方で、煙突掃除の少年には児童労働の典型の一つとして認知されている面もあった。その根拠は、保護規制運動が1760年代から1875年の煙突掃除法の成立までと、極端に長期化したことにある。業種における児童の雇用が廃止に至るまでに、他の業種の年少労働者とくらべて長い期間を要したため、児童搾取の顕著な例として取り上げられたのである。また、子ども期への関心から、児童労働を代表するシンボルとして彼らが主題化されたこともあった。しかし、表象としてのインパクトの強さそのものに焦点が当てられることは、ほとんどなかった。それゆえ、表象の観点から煙突掃除の少年に再照射することは、児童労働研究への新たなアプローチとして、一考の価値がある。

「クライミングボーイ」は、煙突内部を登るという独特な掃除方法に特化して彼らを表す言葉で、OEDには、“掃除のための煙突登りに雇われていた少年たち”と記載されている。最古の用例は、1775年の博愛活動家ジョナス・ハンウェイのパンフットで、最後の用例は1884年のものである。「クライミングボーイ」とは、まさに、保護規制運動の黎明期に登場し、その終焉と共に役割を終えた言葉であった。「クライミングボーイ」のもう一つの特徴は、明確な定義付けがされておらず、煙突内部を登るという行為の捉えられ方によって含意が変化することである。報告者は、この言葉が煙突掃除の少年という表象の形成に影響を与えたのではないかと考え、一連の運動を「クライミングボーイ」の含意の変化を通して捉え直そうと試みている。

煙突掃除の少年に対する運動は、三つの時期に分かれる。第一期は1760年代から1803年まで、第二期は1803年から1820年頃まで、第三期は1840年代頃から1875年までが該当する。特筆すべきなのは、第一期と第二期の間で、運動の意図が保護規制のための規定の設置から、煙突掃除業における児童の雇用廃止に変化したことである。

第一期の1775年のハンウェイのパンフレットでは、「クライミングボーイ」は、煙突掃除業における役割の一つと記載されており、Apprenticeなどの区分けよりも職業事情に特化した表現だと読み取れる。また、1778年のアンドリュースのパンフレットでは、「クライミングボーイ」は、少年たちを技術的な特徴によって区別したものだと書かれている。

一方、第二期の1803年のSSNCBのパンフレットでは、「クライミングボーイ」は主に掃除器に言及する箇所で登場する。1803年に結成された民間福祉団体SSNCBは、煙突掃除業における児童の雇用廃止を目的に掲げた初めての団体だが、その背景には、少年たちの代替となる煙突内部用掃除器の開発の成功があった。また、1817年に煙突掃除の少年に関する特別調査委員会が提出した報告では、「クライミングボーイ」は、掃除器という器械を用いた新式の掃除方法に対して、人体を用いた旧式の方法を指す言葉として、掃除器の対語のように登場し、煙突掃除の少年の廃止を訴える文脈で使用されている。

このように「クライミングボーイ」は、第一期では、煙突掃除業において少年たちが就いた役割を示していたのにくらべ、第二期では、新式の器械という掃除方法に対して旧式の方法を指す言葉に変化しており、運動における意図の変遷を反映している。

質疑では、煙突掃除の「少年」という概念に対して、対象となる年齢や煙突掃除業に少年が登場する流れを明確にする必要性が指摘され、比較対象の設定が促された。さらに、同時代において、煙突掃除の少年をイングランド産業革命期の労働として位置付けることの是非も言及された。

【研究発表４】

# イギリス「作家協会」設立とその文化的意義

麻畠 徳子

イギリス「作家協会」は、作家の著作権等を保護する目的で、1883年9月にウォルター・ベザントの呼びかけによって設立された。協会設立後の成長はめざましく、その会員数は設立当初68人に過ぎなかったものが、92年には870人にまで増加し、またその会員のなかには当時の文壇を代表する著名な作家も数多く含まれていた。協会の活動が1890年代初頭まで軌道に乗った背景には、その設立時期と当時の文学市場における地殻変動の時期とが上手く合致したという事実があったといえる。ヴィクトリア朝の文学市場を長きにわたって席巻してきた「三巻本」の慣習が終焉を迎え、文学の商業的側面がかつてないほど顕在化してきたこの過渡期にあって、作家たちはその時代の変化を敏感に察知し、作品の市場価値と、その価値にたいする現実的な権利要求の必要性を意識するようになってきた。本発表では、急速に商業化していくヴィクトリア朝後期の出版業界において、作家たちが、その変化の作品の質に及ぼす影響をどのように捉え、対応していったのか、その反応を、「作家協会」の活動方針や理念をつうじて明らかにしようと試みた。

まず、協会設立当初の1884年における発起人ベザントの見解を確認するうえで重要となってくるのは、彼が4月25日にイギリス王立科学研究所で行った「The Art of Fiction」という講演である。この講演には、当時の文学市場の中心商品であった「小説」の芸術的地位を向上させようとする狙いがあったが、そこで展開されたベザントの小説技法論があまりに実践的で素朴なリアリズム小説論であったため、皮肉なことに、ヘンリー・ジェイムズによって反論された同名のエッセイにおける深遠な小説技法論と対比されて、前者にはこれまで批評的関心が払われてこなかった。しかし、両者の見解を比較してみると、小説の芸術性を批評するうえで明確な評価基準を持たなければならないという主張には相通ずるところがあるにも関わらず、のちのモダニズム小説家らがジェイムズを真の芸術家として称揚しようとした反動から、ベザントの主張や、ひいては作家協会の活動方針や理念は、偽善的な商売人のものと決めつけられる傾向にあったことが分かる。本発表では、こうした図式的な対立構図を取り外し、ベザントが講演やその後の協会機関誌『The Author』で主張しようとしていたことを詳細に考察する重要性を強調した。

それでは、協会発起人ベザントが講演でもっとも主張したかったことは何なのか。そして、協会の活動をつうじて達成しようとしていた小説の未来とは、どのようなものだったのか。こうした観点から、先の講演内容を検討すると、ベザントはここで「このたび新たに創設された作家協会」について言及し、その存在が今後小説家を志望する若者たちが世に出るうえで良き導き手となるだろうということを謳っている。講演の時期と協会創設時期がちょうど重なっていたことを踏まえると、ベザントにとって、講演の目的のひとつは、「作家協会」設立の意義がこの先に生み出される小説の質の向上にある、と公言することであったといえるだろう。ベザントは、のちの協会機関誌上でもくり返し、協会が若き作家志望者の優れた相談役となるだろうと主張する。協会のこうした教育的指導は、才能のあるなしに関わらず全ての原稿を出版までこぎつけさせるのではなく、全く売れる見込みのない原稿に関しては断念するように促す場合も含んでいる。つまり、作品の文学市場における価値を考えたとき、書き手は必ずその商品的価値と芸術的価値の両者を検討しなければならないのであるが、ベザントはそこで「小説の技法」というある評価基準を前提とすることによって、不当な対価で駄作を量産することを禁ずる「職業作家」としての倫理観を養うことを重要視していたといえるだろう。

ヴィクトリア朝後期は、急激な読者層の拡大により小説への需要が高まった結果、文学市場には三文文士が氾濫し、出版者に隷属する作家の劣悪な経済状況が深刻化していた時期であった。ベザントは、こうした状況を改善するためには、作家が出版契約についての知識を共有し、正当な権利を主張するとともに、作家一人ひとりが職業作家としての自覚を持つことが不可欠だと理解していた。そして、ベザントが想定する職業作家とは、出版者に隷属することなく、経済的にも精神的にも自立を獲得するものであり、ベザントはその一助となるための「作家協会」という組織を構想したといえる。その存在は、一方でアマチュア作家の淘汰に働きかけるものであったが、他方でこれから執筆される小説の質の向上と書き手の経済的、精神的自立を志向するものであったことは評価できるだろう。

【研究発表５】

# 紳士の国のコピー文化
## ーヴィクトリア朝初期のデザイン奨励政策ー

松隈 達也

本報告はイギリス産業革命をデザインという視点から眺めようと努めた。とりわけ1840年前後のデザイン著作権（意匠権、copyright of design）に着目することで、綿工業都市の地域文化の諸相や自由貿易を志向するイギリスの世界市場戦略が垣間見えた。

ことの発端は、1839年のデザイン著作権改正法から綿織物・キャリコが除外されたことだった。同改正法では、絹織物や毛織物のデザイン（意匠＝図案、模様、色彩）に対して12ヶ月間の著作権保護が認められたが、キャリコ製品に限っては18世紀以来、デザイン保護は3ヶ月間のままであった。そのため一部のキャリコ捺染業者が公正を求めて12ヶ月間の保護延長を訴えた。彼らによると、保護期間の延長はオリジナル・デザインの創作を促し、デザインの質を向上させ、市場競争力を強化させる、とされた。これを受けてイギリス議会も改正法案提出に動いた。

しかしながら、これに真っ向から反対する人々が現れた。デザイン著作権の保護延長は不要と激しく叫んだのは、マンチェスタの捺染業者たちであった。反対派の抵抗は根強く、その後の著作権審議は難航した。本報告では、1840年前後のデザイン著作権の賛成派と反対派の証言を分析しながら、彼らの間に具体的にどのような対立があったのかを明らかにした。

第一章ではランカシャ地方のキャリコ捺染業について概観した。とくに注目すべきは、彼らの生産方法であった。彼らの多くはフランスから図案を購入し、あるいは市場で人気のある商品から無断で意匠をコピーするなど、自前でデザインを創作しなかった。ある証言によるとデザインの専門的指導を受けた経験がないため、自力ではデザインできないと嘆く生産者もいた。捺染業者の多くはコピーによる安価な大衆品製造に重点を置いていた。「世界の工場」と称されたイギリスの綿織物工業は、実のところ「コピー大国」だった。

第二章ではコピー行為を非難する著作権保護賛成派と、安価な製造をめざすコピー容認派との論争を取り上げた。彼らによる豊富な証言から明らかになったのは、一つに市場の問題であった。オリジナル・デザインで高級品を製造した人々はおもにアメリカやヨーロッパ大陸、本国など伝統的な市場を重視した。他方、中級以下の品質で、コピー商品を容認する人々はおもに南米やインド、アジアなど、競合の少ない比較的新しい市場をめざしていた。著作権の賛成派・反対派の議論はまったく溝が埋まらないまま、審議は決着がつかなかった。

第三章では1841年と42年の庶民院審議に注目した。議会内部でも反対派は根強く、また賛成派のなかにも保護期間を6ヶ月や12ヶ月といった意見対立があった。こうした膠着状態を打ち破り、デザイン著作権改正法を後押ししたのは、ピール首相による発言であった。ピールは市場競争におけるデザインの重要性を強く認め、将来的に南米やインド市場でもデザイン競争は軽視できないと訴えた。同じく賛成派のモリソン議員は「イギリス様式（English style）」をつくり出すべきと訴えた。ピールを取り巻く賛成派議員は製造業国家としての将来像や、イギリスの名誉などを訴えて、説得策を講じたのであった。デザインの問題は「イギリスらしさ」「イギリスのあるべき姿」の認識と不可分だったといえる。

以上、見てきたように「デザイン・コンプレックス（美的劣等感）」に苦悩したイギリスのキャリコ捺染業者たちは単に美術的な、あるいは抽象的な道徳の問題を議論したのではなく、きわめて具体的な世界市場をめぐる論争を戦わせていた。言い換えると、世界市場をめぐる熾烈な争いのなかでデザイン著作権は考えられていた。膠着状態に陥った産業界に介入したイギリス議会は、当時の基幹商品であったキャリコに対して長期的な視野から保護を決定した。イギリスの将来像がそこには結びつけられていた。同時に、3年にわたるデザイン著作権審議はデザイン教育やデザイン登録制度とも関連づけられるなど、国家戦略として総合的なデザイン奨励政策が可能になっていく重要な通過点であったともいえた。

# 日本ヴィクトリア朝文化研究学会2014年度総会報告

日時：2014年11月8日(土)　17：45～18：00
場所：上智大学四谷キャンパス 12号館102室

## Ⅰ　報告事項

1．2014年度活動報告について
運営委員会
1回目、8月；2回目、2015年1月開催予定
理事会
11月、大会の前日
編集委員会
3回［1回目、2月；2回目、7月；3回目、8月］
会員名簿
ウェブ公開開始、3月
会員名簿の更新、6月
次回更新、12月の予定
会員業績報告
ウェブ報告開始、3月
第15回大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集
3月；12月末締切

2．ニューズレターについて
第13号5月に発行

3．学会誌について
第12号11月に発行

4．日本ヴィクトリア朝文化研究学会優秀論文賞について
受賞者なし

5．全国大会関係
2014年11月8日　第14回全国大会開催（上智大学）

## Ⅱ　審議事項

1．2013年度決算について
報告の通り了承

2．2014年度予算案
予算案を了承

3．2015年度大会について
同志社大学京田辺キャンパスで2015年11月7日(土)に開催予定
※第2候補として11月21日（土）を予定

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
2013年度決算報告書
（2013.4.1～2014.3.31）

《収入の部》　　単位：円

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 5,254,978 | |
| 利子 | 538 | |
| 出展料 | 30,000 | 6社 |
| 学会費 | 1,623,000 | 一般会員249名、学生会員12名 |
| 大会補助金（甲南大学） | 79,286 | |
| その他 | 12,640 | 6,987,802+12,640(懇親会の残金)<br>=7,000,442 |
| | | |
| | | |
| 合計 | 7,000,442 | |

《支出の部》

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 通信費 | 83,726 | |
| 大会経費 | 199,724 | 大会会場費、プログラム・ポスター製作・郵送費、アルバイト料、茶菓代など |
| N. L.作成費 | 115,000 | |
| 学会誌作成・郵送費 | 565,530 | |
| 学会誌用図書費・学会賞 | 77,048 | 学会誌用図書（47,048）+学会賞（30,000） |
| 振込手数料 | 29,780 | |
| 消耗品費 | 12,865 | |
| 役員会費 | 17,000 | 理事会会場費・弁当代、運営委員会お茶代、編集委員会お茶代 |
| 役員交通費 | 171,240 | |
| 非会員謝礼、交通費等 | 0 | |
| その他 | 83,865 | 封筒印刷代（71,400)+デジタル表彰状代（5,365）+NL発送アルバイト代（3,000×2名）＋振り込み用紙印字代（1,100） |
| | | |
| 合計 | 1,355,778 | |

| | | |
|---|---|---|
| 次年度繰越金 | 5,644,664 | |

以上のとおりご報告致します。
2014年5月22日　　会計　大嶋　浩

上記の報告は監査の結果，正確であることを認めます。
2014年5月28日　　会計監査　河村　民部

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
2013年度懇親会決算報告書
（2013.11.9）

《収入の部》　　単位：円

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 懇親会費事前振り込み | 170,000 | 5，000X34名 |
| 懇親会費当日支払い | 90,000 | 18名（会員15名＋非会員3名） |
| | | |
| 合計 | 260,000 | |

《支出の部》

| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 口座徴収料金 | 2,360 | 振り込みの際、徴収される料金 |
| 飲食代等 | 245,000 | 料理・飲み物代（甲南大学生協） |
| | | |
| 合計 | 247,360 | |

| | | |
|---|---|---|
| 次年度繰越金 | 12,640 | 学会に移算 |

以上のとおりご報告致します。
2014年5月22日　　会計　　大嶋　浩
上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。
2014年5月28日　　会計監査　　河村　民部

# 日本ヴィクトリア朝文化研究学会2014年度会計予算案

(2014.4.1～2015.3.31)

| 《収入の部》 | | 単位：円 |
|---|---|---|
| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
| 前年度繰越金 | 5,644,664 | |
| 会費 | 1,530,000 | 一般会員249名、学生会員12名(2013年3月31日現在) |
| 出展料 | 25,000 | ５社 |
| 合計 | 7,199,664 | |

| 《支出の部》 | | |
|---|---|---|
| 項　目 | 金　額 | 備　考 |
| 通信費 | 100,000 | |
| 大会経費 | 250,000 | |
| N. L.刊行費 | 133,300 | カラー印刷代（119,800）＋作成補助費（9,000+4,500） |
| 学会誌作成・郵送費 | 550,000 | |
| 学会誌図書費 | 50,000 | 書評用図書 |
| 優秀論文賞 | 50,000 | |
| 振込手数料 | 30,000 | |
| 消耗品費 | 35,000 | 文具等 |
| 役員会費 | 25,000 | 理事会、運営委員会、編集委員会 |
| 役員交通費 | 200,000 | 運営委員会、編集委員会 |
| 非会員謝礼、交通費等 | 130,000 | |
| 予備費 | 100,000 | |
| 合　計 | 1,653,300 | |
| 次年度繰越金 | 5,546,364 | |
| 合　計 | 7,199,664 | |

# 会員名簿の公開について

会員名簿を以下のところにアップしておりますので、ご利用ください。パスワードは2014年3月16日配信のメーリングリストに載っておりますので、ご確認願います。なお、公開用の会員名簿は、年に二回、5月～6月頃と11月～12月頃に更新していく予定です(http://www.vssj.jp/address/vssj-address.xlsx)。

# 会員の業績について

会員の業績を本学会のホームページの「新着情報」(http://www.vssj.jp/v-news.html)で掲示しております。つきましては、会員の方は、業績に関する情報を、随時、webmaster(松岡光治氏)までメールでお知らせください。

「新着情報」に載っている青文字の webmaster をクリックすると、Eメールが立ち上がります。そのメールに業績に関する情報を記入してお送りいただければ、毎月末、その情報が「新着情報」にアップされます。なにとぞ会員の業績の情報収集にご協力願います。

報告できる著訳書は単著・編著・共著・単訳・編訳・共訳に限ります。必ず、以下の記載要領と(例)に従ってください。

(記載要領)
・共著と共訳の場合は自分以外の共著者名と共訳者名を(会員以外は除いて)すべて列記のこと。
・英数字はすべて半角で表記のこと。
・出版社に当該図書専用の紹介サイトがある場合は、その URL も記載すること。

(例1:単著の場合)松村昌家(著)『ヴィクトリア朝文化の世代風景――ディケンズからの展望』(英宝社、2012年2月、3,800円)
(例2:編著の場合)井野瀬久美惠(編)高田実・谷田博幸・金山亮太・小関隆(共著)『イギリス文化史』(昭和堂、2010年10月、2,400 円)
(例3:共著の場合)川崎明子・河内恵子・松村伸一(共著)『亡霊のイギリス文学――豊穣なる空間』(国文社、2012年9月、3,800円)
(例4:単訳の場合)小野寺健(訳)ゴールドスミス(著)『ウェイクフィールドの牧師――むだばなし』(岩波文庫、2012年1月、840円)
(例5:編訳の場合)松岡光治(編訳)『ヴィクトリア朝幽霊物語(短篇集)』(アティーナ・プレス、2013年3月、800円)
(例6:共訳の場合)中島俊郎・玉井史絵(共訳)ルーシー・ワースリー(著)『暮らしのイギリス史――王侯から庶民まで』(NTT出版、2013 年1月、3,600円)

【学界動向】

# 19世紀末イギリスにおける「社会」の再建と理想主義

高田　実

1873～96年、イギリスは長期の「大不況」を経験し、「世界の工場」の地位から滑り落ちるとともに、「ヴィクトリア朝の繁栄」にも大きな陰りが見えるようになった。人びとは、わが母国が「衰退」しているのではないかという不安を抱くようになる。政財界では、政策路線をめぐる対立が前面にでてくる。アイルランドに自治を与えるかどうか。帝国の統合を進めるのか、膨張を進めるべきか。「ドイツ製品」の流入、「アメリカの侵入」に対して保護貿易を採用すべきではないか。イーストエンドにおける「貧困の発見」にどのように対処すべきか。もはや「自由主義」と「繁栄」とが等置できなくなり、何らかの制度変更あるいはシステムの転換が模索されるようになっていた。

そのような現実の「危機」を背景として、1880年代以降のイギリスでは社会再編を求める新しい知が台頭する。社会主義思想はその典型であり、体制転換を求めるフェビアン協会、独立労働党、社会民主連盟などの社会主義政党が結成された。もちろん同じく「社会主義」といっても様々な考え方が存在したようであり、W.モリスとE.B.バックスは「社会主義者同盟」を結成し、その機関誌『コモンウィール（Commonweal）』に連載した記事をまとめて、1893年に『社会主義―その成長と帰結』として出版している（邦訳は昨年、大内秀明監修、川端康雄監訳で晶文社から刊行された）。

ここで注目すべきは、この雑誌名が示すように、「社会主義」対「自由主義」、あるいは「集団主義」対「個人主義」という二項対立の図式を超えて、この時代には政治的立場を超えて共有された知の世界があったことである。新たな道徳と社会秩序、つまり「社会的正義（social justice）」を求める思想が大きな力を持つようになり、何が「よい社会」か、倫理的な規範のレベルで問い直されていたのである。

「ウェルフェア」概念の史的系譜を跡付ける深貝保徳によれば、「社会的正義」という言葉自体は、1840年のT. シモンズ. マッキントッシュ『野蛮的正義、市民的正義および社会的正義から演繹された責任の性質に関する探究』が初出であるが、そこでは「功利性」に基礎づけられ、「約束ごとや契約のなかでお互いに責任を負う『市民的正義』の枠組みのなかに責任概念の本格化」が見られ、「社会的正義」はその一層の「高度化」と位置づけられた。こうした初期の「社会的正義」に、より積極的に「規範的な意味」を持たせたのがJ.S.ミルであり、さらにL.T.ホブハウスにおいて、「調和の原理」のもとで、公共善と諸個人の善が調和し、権利と義務の相互補完関係のなかで、社会的ウェルフェア（social welfare）が実現するとされるようになったという。（「ウェルフェア、社会的正義および有機的ヴィジョン―ブリテン福祉国家の成立前後における概念の多元的諸相」、小野塚知二編『自由と公共性―介入的自由主義とその思想的起点』、日本経済評論社、2009年、264～268頁）。

さらに、深貝の指摘として重要なのが、「ブリテン思想界では、19世紀半ばに至るまでに、進化論や有機体的な社会ヴィジョンを受け止める素地ができていた」（同上、269頁）ことだ。この素地に進化論的要素が加わり、1880年代には、A.マーシャルの「厚生経済学」、W.H.マロックの「都市所有論」、B.ボサンケの「国家理論」などで、この有機的ヴィジョンが深化され、1900年前後には、J.A.ホブソンによってさらに「人間的ウェルフェア」が強調されるようになったとされる（同、270～274頁）。

こうした社会的正義の議論の深化に大きな影響を与えたのが、「理想主義（Idealism）」である。日本でも、その知的指導者、T.H.グリーンの理想主義についてはつとに言及されるところであるが、理想主義はグリーンに限らず、より広い人脈、より深い社会への浸透度、そしてより長い射程を有していたようだ。この理想主義をよりトータルに捉えようとする研究が世に問われている。近年では、W.J.Mander, *British Idealism: A History* (Oxford University Press, 2011) という大著が、ほぼ網羅的に理想主義の系譜を辿っていて有益である。時間的には、理想主義の最盛期1870年代

から1920年代を中心としつつも、その準備期としての1860年代から検討を始め、衰退後も1960年代までの知的影響力の継続についても考察する。また、中心人物についても、T. H. グリーンの師弟関係を中心として、J.ケアード、E.ケアード、F. H. ブラッドリー、B.ボサンケなどの中心人物だけでなく、日本にはあまり紹介されていない多くの理想主義知識人を描いている。地域的にも、オックスフォードの「絶対的理想主義」、ケンブリッジの「個人的理想主義」、グラスゴウ、エディンバラなどの地方都市における理想主義の普及の姿も描く。こうして、知の継承関係を明確に示しながら、この知的潮流がいかに多様な水脈によって成り立っていることを示す。さらに、理想主義を生きたものとするために、当時の知的論争、政策論議の中に位置づけようとしている。

これに加えて、ボサンケについては、再評価の動きがあるようだ。William Sweet (ed.), *Bernard Bosanquet and the Legacy of British Idealism* (University of Toront Press, 2007)が有益である。

また、理想主義の日本への受容をめぐっては、日本イギリス理想主義学会が、『イギリス理想主義の系譜と河合栄次郎』(世界思想社、2014年)を出版し、S.T.コールリッジからB.ボサンケに至る理想主義の系譜(第一部)、理想主義の批判者(第二部)、河合栄次郎を中心としつつも、より広い日本における理想主義受容の経験(第三部)を論じている。このなかで、個人的に興味をひかれるのは、社会問題への国家干渉の是非をめぐって激しく論争していたL.T.ホブハウスとB.ボサンケが、「倫理的・道徳的な価値観を中軸」とする点で共通しており、グリーンという共通の「知的土俵」の上で、その解釈をめぐって対立していたにすぎないとする芝田秀幹の解釈である(「第10章　ボサンケとホブハウス」)。また、芝田は、『イギリス理想主義の政治思想―バーナード・ボサンケの政治理論』(芦書房、2006年)で、新しいボサンケ理解を提示しているばかりでなく、『ボサンケと現代政治理論―多元主義的国家論、新自由主義、コミュニタリアニズム』(芦書房、2013年)では、ボサンケをコミュニタリアニズムと結びつける議論まで展開している。この他、行安茂『近代日本の思想家とイギリス理想主義』(北樹出版、2007年)も、中島力造、高山樗牛、網島梁川、西田幾太郎、河合栄治郎のグリーン受容を論じている。

著者の関心からすれば、こうした理想主義を哲学史や思想史の一齣としてではなく、世紀末イギリスの現実社会を変革する生きた力、文化の力として捉えなおすことが大事ではないかと考える。近年の新しい研究成果を取り入れながら、理想主義に関する「インテレクチュアル・ヒストリー」の名著、Stefan Collini, *Public Moralists: Political Thought and Intellectual Life in Britain 1850-1930*, (Oxford University Press, 1991)や、ウェッブ夫妻とボサンケ夫妻の「混合ダブルス」の社会政策論争史を扱った名著Alan M. McBriar, *An Edwardian Mixed Doubles: The Bosanquets versus the Webbs A Study in British Social Policy 1890-1929*, (Oxford University Press, 1987)などを発展的に継承する研究が求められているといえよう。

J.ハリスは、世紀末の社会理論と国家の関係について次のように記す。「19世紀初頭の思想および100年後のほとんどの社会思想学派の双方とはきわめて対照的に、後期ヴィクトリア朝とエドワード期イギリスの社会理論家は、ほとんど例外なしに、社会科学の主要な目的は公共の徳(public virtue)の促進にあると確信していた。そして、彼らは道徳性、能動的シティズンシップ、それに『公共精神(public spirit)』が、秩序ある社会と徳に富んだ国家には不可欠な隅の首石であることを確信していたのだ」、と(Jose Harris, *Private Lives, Public Spirit: Social History of Britain 1870-1914*, Oxford University Press, 1993, p. 250)。

ヴィクトリア朝の文化を今日的視点から見直そうとする時、政治的・社会的な立場の違いを超えて共有されていながら、後の時代の「学問」分野が分断してきた、その時代特有のある倫理性をもった知の総体とその世界的な広がりを見つめ直し、正面から対話を試みる必要があるように思える。とりわけ、グローバルな市場主義と競争原理の蔓延、他者との連帯の契機を失いアトム化する個人、そしてまともな議論もないまま軍事大国化にむけ暴走する国家、個人・社会・国家のすべてが壊れていく今日の日本を目の当たりにした時、衰退のなかで両義性をもちつつ「社会」の再編を模索した知の潮流と、健全な批判精神を保ちながら格闘する意味は決して小さくはないであろう。

第15回大会シンポジウム趣旨説明

# 神はどこにおられるのか
## ―ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰―

【趣旨説明】　有江大介

わが国の西欧文化史・思想史研究の最大の弱点は、ギリシア・ヘレニズムとともにその全体の根底にあるユダヤ・キリスト教に関わる側面の探求です。これは、文学や社会史の分厚い蓄積に比してその分野の蓄積が乏しい、ブリテンのヴィクトリア時代研究についても言えることです。本シンポジウムは、荻野昌利氏による、オクスフォード運動とその主導者J.H.ニューマンについて「ヴィクトリア朝のイギリスの思想文化を通観するためには、宗教界ばかりでなく、イギリス全土を大激震の渦に巻き込み、計り知れないほどの精神的影響を及ぼした」という指摘(『歴史を読む――ヴィクトリア朝の思想と文化』英宝社、2005年、135頁)を“導きの糸”としてその弱点に切り込もうとするものです。科学の時代であると同時に信仰の時代でもあったヴィクトリア時代の宗教事情について、限られた領域を対象とするとはいえ、主として知識人が信仰や神について何をどう考え、悩んだのかを、3報告者がそれぞれの視点から検討する予定です。

### 1　有江大介「J.S.ミルのイエスとJ.H.ニューマンの神」

信仰と科学が相克するヴィクトリア時代の思想状況が、時代を代表する知識人J.S.ミルとJ.H.ニューマンのキリスト教論や信仰観にどのように刻印されているかを明らかにします。実証主義思想家と目されたミルについてはまず、死後出版の『宗教三論』にあるイエス像とハリエット・テーラーを失って以後の最晩年の“希望の宗教”観を示すとともに、そのミルがオクスフォード運動をどのように見ていたかを紹介します。それを媒介に、次にニューマンの『アポロギア』と『承認の原理』により彼独自の「推断的直観」による彼の神への接近の道程を跡づけます。それが結局はL.スティーヴンによって不可知論と認定される点を採り上げ(『不可知論者の弁明』)、そこにミルとニューマンのヴィクトリア時代人としての意外な共通性が表れていることを示します。これらの探究を通じて、キリスト教信仰や神の問題がヴィクトリア時代知識人にとっていかに重大であったかが、改めて明らかになると思います。

## ２　松本哲人「J. プリーストリーとT. H. ハクスリー――18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人」

「啓蒙Enlightenment」は科学と宗教の分離として理解されることが一般的です。とりわけフランスを中心とした啓蒙は、宗教を科学――社会科学にせよ自然科学にせよ――から放棄する道を選びました。しかしながら、18世紀後期イングランド啓蒙は、フランス啓蒙からの影響を受けつつも、宗教と科学を切り離すのではなく、いかにその両者に折り合いをつけるかを課題としました。その課題にもっとも熱心に取り組んだ思想家の一人としてジョセフ・プリーストリーを挙げることができます。そのプリーストリーを、19世紀後期に、J.S.ミルの合理主義的宗教批判の系譜に連なるハクスリーは非常に高く評価しました。ハクスリーはプリーストリーのどのような部分を高く評価したのでしょうか。今回、その点に焦点を当て、18世紀後期イングランド啓蒙の遺産を約1世紀後のヴィクトリア時代に生きたハクスリーがどのように受け取ったのかについて明らかにします。この解明を通じて、ヴィクトリア時代の信仰と科学の相克の一端を垣間見ることができると思います。

## ３　小田川大典「ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景――ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に」

ステファン・コリーニによれば「節制、自助、倹約、勤勉、義務、自律といったヴィクトリア期の中産階級の一般的な徳目」の根底には「意志の力によって、官能的すなわち動物的な衝動と情念を克服する能力」を過度に強調する「ヴィクトリア朝道徳の自覚されざるカント主義」としての「品性」（character）のエートスが存在し、ジョン・スチュアート・ミルやマシュー・アーノルドの「教養」（culture）論は、まさにそうした厳格なピューリタン的「品性」のエートスに対する批判をその眼目としていました。本報告では、コリーニの指摘を踏まえながら、ミルの教養論が、三位一体と原罪を否定し、善人イエスを模範とした人間の完成可能性を唱えるユニテリアニズムを背景としていたこと、そしてアーノルドの教養論が、父トマスから継承したリベラル・アングリカニズムの影響下で形成されたことに着目し、ヴィクトリア朝の教養論の宗教的な背景の一端を明らかにすることを試みたいと思います。

第15回大会ラウンドテーブル　企画①　趣旨説明

# 大阪・神戸とヴィクトリア朝英国
## ―産業と文化の観点から―

【趣旨説明】　松村 昌家

大阪の開市と神戸の開港の延期交渉の使命を帯びた幕末使節団がロンドンに着いたのは、1862年4月30日の夕刻、クラリッジズ・ホテルに旅装を解いた。開けて5月1日は第2回ロンドン万博開幕の日だ。使節団三使ほか4名が、サムライ姿で西欧諸国の貴賓の群れに混じって、その晴れの開会式の舞台に立った。初めての異文化体験であり、日英文化交流の夜明けでもあった。

使節団三使は、6月5日から7日までの3日間、英国外相ジョン・ラッセルと協議を続け、大阪、神戸の開市開港を向こう5年間、1868年1月1日まで延期することで合意、ロンドン議定書の調印が交わされた。1868年―戊辰年間、明治元年に新大阪・新神戸が誕生したことになるのだ。この後両都市はいかなる産業を起こし、いかなる文化を生み出したのか。興味津々たる問題で、ヴィクトリア朝文化研究学会にとっても重要な関心事でなければならないのである。

## 松村昌家「開市後の大阪とヴィクトリアン・マンチェスター」

1883年7月、大阪紡績会社は「東洋のマンチェスター」になることを目標にして操業を開始した。約20年後には三重紡績を合併し、その名を東洋紡績会社に変えて飛躍的な発展を遂げるのだが、この会社が現実的にマンチェスターとは切っても切れない関係にあったことに照らしていえば、むしろ日本のマンチェスターの感があった。

1872年にマンチェスターを訪れて、その綿業の盛んなのに衝撃を受けた岩倉使節団が打ち出した国策としての紡績業奨励もあって、大阪発の紡績業は全国に広まった。そして鉄道で結ばれた産業都市大阪と貿易港神戸はあたかもマンチェスターとその貿易港リヴァプールの様相を呈するようになったのも興味深い。大阪の地に紡績会社が創設された理由や動機がなんであれ、あらゆる面から見て、創設者渋沢栄一に先見の明があったことは確かだ。しかし大阪とマンチェスターとを結びつけるのに功があったのは大阪紡績の育ての親ともいうべき山辺丈夫であった。

1877年からロンドンに留学していた山辺が渋沢からの勧誘を受けて、まず考えたのはマンチェスターへ出かけて、実地に紡績の仕事を体験することであった。帰国までのわずか一年足らずの間に彼は可能な限りその習得に努め、とりわけ機械類の操作法の勉強に励んだ。その間に彼がオールダムのプラット兄弟社を訪ねたのは特記に値する。紡績機械の製造で知られた会社で、1851年のロンドン万博で評議員賞を獲得、1862年の万博には10種に及ぶ紡績機を展示して注目を浴びた。1862年の遣欧使節団の何人かはこれらの展示物を目の当たりにしていたことになる。大阪紡績はこのプラット兄弟社から輸入した一万五百錘のミュール紡績機を据えて、創業の日を迎えたのである。　それからの紡績工場の発展の歴史を顧みるとき、忘れてならないことがある。その長い歴史はすなわち『女工哀史』でもあったということである。

## 濱下 昌宏「神戸外国人居留地とヴィクトリア朝文化の影」

大英帝国の世界進出と栄華を築いたヴィクトリア時代(1837-1901)と、日本の近代化の橋頭堡とも目される神戸外国人居留地時代(1868-1899)とは歴史的に重なる。経済活動を通じての国際化、あるいは植民地主義そして帝国主義というヴィクトリア時代英国の動静は、神戸にも反映された。英国は在日外交団のリーダー格であり、在日英国人も他国に比べ圧倒的多数であった。神戸においても、英国人在住者数は際立って多かった。

神戸の居留地開設時には、すでに英国はインドおよび中国に進出しており、東インド会社から新興の商社への継承によって英国―インド―中国という三角貿易を展開していたが、その取引の闇の部分とはいうまでもなくアヘンの密売や専売であり、アヘンの取締を目指した清国政府との軋轢によって勃発したアヘン戦争(1840-1842)に勝利した英国は、サッスーン商会やジャーディン・マセソン商会といった、アヘン貿易で富を増大させた者たちが、その富を安全かつ迅速に英国本国に送金すべく1865年に香港上海銀行を設立する。またヴィクトリア女王より勅許を得て1853年に設立されたチャータード銀行も、そうした貿易商会を支援した。そして、神戸外国人居留地へと上記の商社や銀行は当然のように進出してきた。

むろんインフラも含め文明都市の体裁を整えての居留地の生活については、生活や勤務の楽しかった思い出を記した居住者もいたが、しかし、一方で、ラフカディオ・ハーンの苦言も注目すべきであろう。『神戸クロニクル』紙の記者として1894年に熊本より移ってわずか2年ほどの滞在であったが、居留地の欧米人の生活ぶりに露骨な嫌悪感を示している。それは、たとえ彼の繊細な日本趣味の反映とは言え、当時の世界を席巻していたヴィクトリア朝文化とそのエートスが日本に上陸し浸透していくことへの警鐘でもあったであろう。

## 石戸 信也「近代神戸におけるヴィクトリア朝文化」

「東洋の居留地で最も良く設計された美しい街」(『The Far East 』明治4年4月17日)と評された神戸外国人居留地は、126区画を計4回の競売の結果、イギリスの購入区画は65となり、全区画の半分強となった。また、明治中期の居留人数の国別割合もイギリスは25%と欧米では突出して最多であった(横浜は21%)。この意味でも神戸の近代化に最も影響を与えた欧米の国家は19世紀の大英帝国であったと言える。

近代神戸で活躍し、その発展に貢献したイギリス人。それは、居留地の計画者J・W・ハート、「ハンター坂」に名を残す実業家E・H・ハンター、六甲山開祖であり、日本初のゴルフクラブ「神戸ゴルフ倶楽部」の創設者、また神戸オリエンタルホテル経営でも尽力したA・H・グルーム、神戸外国倶楽部や同志社ハリス理化学館など各地に名建築を生み出した建築家A・N・ハンセル、ラムネ飲料と居留地自治、また災害支援やK. R. &A. Cの近代スポーツ普及でも活躍したA・C・シム、布引ダムの水道計画に寄与したW・K・バルトン、炭酸飲料の製造販売で著名なJ・C・ウィルキンソン、日露戦争期の日本を記録し、六甲山系のネズミにも名を残す博物学者R・G・スミスなど各分野で数多い。居留地・雑居地に数多く建立された擬洋風建築の洋館や、海外貿易最前線の商館、近代港都として発展する景観を明治～昭和初期の多くの絵葉書・古写真から振り返り、教会建設や聖書の発行など居留地を源流とするキリスト教伝道、洋風ホテルや料理、神戸洋服文化の伝統、神戸家具と称される洋家具、日本写真史草創期を彩った幾多の写真館、小泉八雲も筆をふるった英字新聞、そして阪神間の鉄道交通の草創期を担ったイギリス人技師や運転士など、神戸のハイカラ文化にヴィクトリア朝文化が与えた影響と日本文化の変容、さらには近代化に果たした意義を考察し、神戸を中心にその周辺地域も含めて検証してみよう。

第15回大会ラウンドテーブル　企画②　趣旨説明

# ヴィクトリア朝文学と宝塚歌劇
## ―ダンディズム・植民地・スペクタクル―

【趣旨説明】　桐山 恵子、西垣 佐理

一般的に宝塚ファンというと極めて特異な集団であり、上演作品は、この世には存在しない男性像を追い求める夢見る少女の欲望を満たす、子供だましのようなものと考えている人も多い。しかし宝塚歌劇団は、女性だけで構成される世界的にみても唯一の劇団であり、今年、創立101年目を迎えた歴史と伝統を誇る。

宝塚で上演される作品は、座付き作者が書いたオリジナルの脚本以外に、世界の文学作品を脚色したものも非常に多い。そこで今回は、宝塚で上演されたディケンズ、ワイルド、キャロル、ブロンテなどヴィクトリア朝作家の作品、および19世紀英国の社会・文化などを背景にもつ劇作品およびショー作品を紹介する。とくに宝塚男役の美学にもつながるダンディズム、一見、宝塚とは無縁のように思われる植民地がらみの恋愛、英国王室の描き方、さらに妖精、ヴァンパイアなど超自然的存在が登場する作品をとりあげ、ヴィクトリア朝世界が宝塚歌劇においてどのようにスペクタクル化されたかを論じてみたい。

【ラウンドテーブルテーマ一覧】

＊作品名の後の（　）は、宝塚上演時の組と年を記す。

### O. 宝塚歌劇の基礎知識

発案者が宝塚歌劇をきっかけに文学の世界に関心を持ち、文学研究者になった経緯を簡潔に述べ、本ラウンドテーブルの口切り役を果たす。宝塚歌劇を知らない聴衆のために、その歴史と特徴を簡単に解説する。

### 1. 宝塚男役のダンディズムⅠ：ディケンズを中心に

宝塚男役の美学を追及したショー作品『ダンディズム！』(花組1995年)、『ネオ・ダンディズム―男の美学―』(星組2006年)の歌詞において、ダンディーな男性の理想像としてワイルドらがあげられることからも分かるように、宝塚の男役が目指す理想像とヴィクトリア朝ダンディズムには関連性がある。ディケンズの『二都物語』(月組1985年。ちなみに当時の月組トップ大地真央と黒木瞳のサヨナラ公演でもある。花組2003年)および『大いなる遺産』(月組1990年)をブロンテの『嵐が丘』(月組1969年、雪組1997年)などにも言及しつつ分析する。

## 2. 宝塚男役のダンディズムⅡ：ワイルドを中心に

ワイルドの『真面目が肝心』をもとにしてオフ・ブロードウェイで発表された『Earnest in Love』の宝塚版（月組・花組2005年、花組2015年）の上演をはじめとし、宝塚では『アリスの招待状―チェシャ猫ホテルへようこそ―』（タイトルはキャロル作品に依拠するが内容はワイルド作品に基づく）（雪組1996年）、『ドリアン・グレイの肖像』（星組1997年）とワイルド作品が取りあげられてきた。それらを紹介するとともに、同性愛を思わせる男役同士の危うい関係に焦点をあわせた劇作品および「幸福な王子」をモチーフにしたショー作品を考察する。

## 3. 大英帝国と植民地

植民地問題に関連した宝塚作品を紹介し、主なテーマやモチーフなどを分析する。大英帝国とインド・カリブ海地域との関連（『エンドレス・ラヴ』（花組1998年）、『ダル・レークの恋』（月組1959年、星組1997年、月組2007年）、『大海賊』（月組2001年、2015年）、アイルランド独立運動を描いた『エールの残照』（月組1994年）およびオランダ統治下のジャワをめぐる恋愛物語（『ジャワの踊り子』（雪組1952年、1982年、月組2004年、花組2004年）などを扱う予定である。その際、英国王室の描かれ方にも注目したい。

## 4. 精霊・ゴシック・ヴァンパイア

「フェアリー」と形容されることもあるタカラジェンヌと超自然的存在には、元来、深いつながりがある。そこで宝塚作品に登場する妖精、ヴァンパイアなど人間以外の創造物に焦点をあててみたい。またそのような作品には文明vs自然の二項対立が見られることも指摘したい。『PUCK』（月組1992年、2014年）、『LUNA―月の伝言―』（月組2000年）、『Jazzyな妖精たち』（月組2005年）、『蒼いくちづけ』（星組1987年、花組2008年）、『薔薇の封印―ヴァンパイア・レクイエム―』（月組2004年）、『シルバー・ローズ・クロニクル』（雪組2007年）。

## 5. 宝塚歌劇とスペクタクル化

宝塚の作品で特にスペクタクルな側面に焦点を当てた芝居作品、および基本的にはセリフがなく歌と踊りのみで構成されるショー作品を取りあげる。芝居のみならず、ショーにおいてもヴィクトリア朝的設定がしばしば用いられていることを紹介する。

募集中！

## 第15回大会のお知らせと研究発表の募集

第15回大会は、**2015年11月21日(土)午前10時から同志社大学今出川キャンパスで**開かれる予定です。シンポジウムの題目は「神はどこにおられるのか―ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰 」で、コーディネータの有江大介氏(横浜国立大学)を中心に、有江氏、松本哲人氏(徳島文理大学)、小田川大典氏(岡山大学)の各氏がパネリストを務められます。

ラウンドテーブルは二つ行われます。「大阪・神戸とヴィクトリア朝英国――産業と文化の観点から」(提題者:松村昌家氏)と「ヴィクトリア朝文学と宝塚歌劇――ダンディズム・植民地・スペクタクル」(提題者:桐山恵子氏、西垣佐理氏)です。また、川端康雄氏(日本大学)に特別講演をお願いすることになっております。講演題目は「『希望の巡礼』――ウィリアム・モリスの1880年代」(仮題)です。どうぞふるってご参加ください。

研究発表(発表時間30分、質疑応答15分)を希望する会員は、発表要旨(400字)に略歴(氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記)と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送で事務局までお送りくださるか、あるいはメールの場合は、添付ファイルで学会のメールアドレス(victoria@center.konan-u.ac.jp)までお送りください。メールの場合、受け取りの返信が届かない場合は、お手数ですが再度送信してください。**締め切りは2015年7月5日(日)必着**でお願いいたします。なお、学会の性質上、研究発表は「文化研究」に比重をおいたものとします。

【宿泊等について】この季節は秋の紅葉シーズンで京都のホテルは早くから予約で満室となります。ご宿泊を考えておられる先生方におかれましては、できるだけ早くホテルをご予約ください。京都市内だけではなく、近隣の大津、新大阪、大阪(梅田)の宿泊施設をご利用いただければ、同志社大学今出川キャンパスへのアクセスは比較的容易です。京都でのホテル等の予約が無理な場合、ぜひご検討ください。

## 第16回全国大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集

**2016年(平成28年)11月中旬頃に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第16回全国大会(開催場所と日時は今年の8月に決定される予定です。決定され次第、会員の方々に通知いたします)におけるシンポジウム及びラウンドテーブルの企画を募集します。**シンポジウムとラウンドテーブルは、それぞれ2時間30分程度(15分間の休憩を含む)の時間枠を予定しております。**締め切りは2015年12月末日**といたします。

シンポジウム及びランドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野を持つものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会(2016年1月開催予定)で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締切:**2015年(平成27年)12月31日(水)必着**

2. 申請方法:様式は問いません。下記に示す申請書必要記載事項を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までE-mailにてご提出ください。下記のシンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書(Excel形式)を利用していただいても結構です。

※シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書フォーマット(Excel形式)
(http://www.vssj.jp/conferences.htmlからダウンロードしてお使いください)

3. 申請書必要記載事項:
①シンポジウム/ラウンドテーブルのタイトル
②趣旨 (400字程度にまとめてください)
③企画立案者(氏名、所属、連絡先住所、電話番号、E-mailアドレス)
④プログラム
1)司会(氏名、所属)
2)報告者(氏名、所属)
3)各報告者の題目および報告要旨(200字程度)
4)タイムテーブル(全体で2時間30分程度[休憩含む]におさまるように計画してください)
※シンポジウム/ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

4. 提出先:日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局(右記)

**日本ヴィクトリア朝文化研究学会**
**事務局**
〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1
甲南大学文学部 井野瀬久美惠研究室
Tel: 078-435-2344 Fax: 078-435-2578
E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp
http://www.vssj.jp/